Vol. 115, No. 2 Feburary-March 2018　　題字　一萬田 尚登 第５代日印協会会長

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人　日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 115 年）

2017 年 12 月にニューデリーに於て、西川、花柳、藤間、山村各流の日本舞踊家 5 人（五耀會）とインド伝統舞踊の合作公演が成功裡に開催された (C) One Frame Story.jpg

目次

1. インド講演旅行（後半）を終えて…… P. 3
2. 『インド独立の志士「朝子」』余話…… P. 8
3. 日印文化交流ネットワークの設立…… P. 11
4. インドニュース（2018 年 1 月）…… P. 13
5. イベント紹介…… P. 16
6. 新刊書紹介…… P. 18
7. 掲示板…… P. 19

1. インド講演旅行（後半）を終えて

On My Lecture-Tour in India

大阪外国語大学名誉教授・関西日印文化協会会長　溝上富夫　　個人会員

1 月号に掲載の前半はインドの東西を横断する旅だったが、後半は（UP 州を除いて）南北を移動する旅だった。しかしどちらも最後は、首都のデリーで締め括ることになった。今回の講演旅行のルートは右地図の通り。

<写真：今回、講演を催した地域>

9. K.C.Joshi College of Arts （Thane） 11 月 27 日 講堂、出席者約 150 名

ターネ市はムンバイの北に接する衛星都市。衛星都市と言っても、人口は 180 万を超える大都市である。私は、この町にある Vidya Prasar Mandal （学術普及学園）という私立大学の Vijay Bedekar 理事長自らのお出迎えをムンバイの CS 国際空港で受けた。ベデカル博士は、本来は産婦人科医でありながら、インドの古典とくに科学史にも造詣が深く、この分野の泰斗であられる京都産業大学の矢野道雄名誉教授と親交が深い。そのため、付属のアート・カレッジと京都産業大学との間には、学生の交流協定がある。私は過去 10 年間にわたって同大学でヒンディー語を講じた関係で、2014 年にもここのヒンディー語学科で講演したことがある。今回もヒンディー語学科主催だったが、理事長自ら最後まで出席いただいたことと、この講演が YouTube に投稿されたことが今回の特徴であった。

10. Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune)

11 月 28 日 日本語学科教室、出席者約 50 名

この大学は 20 世紀初頭にインドの民族主義運動の指導者としても活躍した、プネー出身の思想家・教育者のバールガンガーダル・ティラクの名に因んで 1921 年に創設された。deemed university（準大学）だが、日本語教育のレベルは高く、日本大使館推薦による日本語及び日本研究者として、インド全国から選抜されて国費で日本に留学する 10 名の内、6 名を本学が占めたと聞いた。国際交流基金の西部担当もこの大学に事務所をおいている。前回 2014 年に講演した時に、「次回は日本語でやってください」との要望を受けていたので、当大学では日本語でやることに当初から決めていた。この旅行中、全編日本語で講演したのはこの大学だけである。内容がやや高度なので、できるだけ平易な日本語で解説した。受講生の顔つきをみている限り理解できているようだった。講演後、質問は？と訊いたが、意外と誰も手を挙げない。私は「日本語を学んでいるからといって、日本人学生みたいに大人しくなってはいけませんよ！」「今日の講演で分からなかったところがあれば、明日ヒンディー語で同じ内容の講演をするので、ぜひ来てください」と言って終えた。

11 月 29 日 講堂、出席者約 100 名

翌日 29 日の夕刻に、Indo-Japan Business Council と TMV 大学との共催で、開会式にディーパク・ティラク学長を招き、全学の教職員と一般市民を対象にヒンディー語による講演会が開かれた。映画評論家のアニル・ザンカル氏も出席された。ロビーでは、日本文化紹介のための「折り紙展示会」が同時開催された。前日、日本語での講演を聴いた学生達も出席していて、同じ内容の講演を2つの言語で聴いてよく理解できたと言ってくれた。

11. MIT World Peace University (Pune)

11 月 30 日 Swami Vivekananda Hall、出席者約 750 名

1983 年創立のマハーラーシュトラ工科大学（その後 MIT 世界平和大学と改称）の大講堂で、経営学部の学生達を主とする 750 名の教職員で大講堂が埋まった。前日に続いて大型のスクリーンを使用して迫力があった。2 時間近く熱弁を奮った結果、会場は初のスタンディング・オヴェイションで応じてくれた。途中誰一人中座する者はいなかった。講演後、日本の

<写真：MIT World Peace University での
スタンディング・オヴェイション>

教育制度や、日印両国の文化の相違や政権が変れば日印関係は変わるか（答えはもちろんノー）、日本におけるビジネスの機会等、多くの質問が出され、最も感動的な講演会の一つとなった。プネーでの３回の講演は、ムンバイの日本総領事館後援に指定され、野田亮二総領事からメッセージを頂戴し、磯貝富夫氏が代読された。磯貝氏は、シャープ（株）インド社長として長年活躍され、退職後はプネーを中心として日印間でビジネス促進・学術交流・文化交流等に積極的な貢献をされている人である。講演後、ヴィシュヴァナート・カラード総長を表敬訪問してお礼を述べた後、その夜タージホテルで催される天皇誕生日祝賀パーティー（前倒しで開かれる）に出席するため、このもう一人の富夫さんと一緒にムンバイに向かった。

12. Bank of Baroda, Corporate Office (Mumbai)

12 月 2 日 Maharaja Sayaji Rao Auditorium、出席者約 100 名

バローダ銀行は資産高２位を誇る国営銀行で、登記上の本店はグジャラート州ヴァドーダラ市にあるが、ムンバイ本店が最大の営業の本拠地である。はじめて一般社会人を対象にした講演を行った。一流銀行だけあって、綺麗に整備された講堂だった。「なぜ銀行で講演を？」と思われるだろうが、多言語国家インドの官僚システムの特徴の一つとして、内務省にも鉄道省にも銀行にも言語部門がある。本店本部次長の Jawahar Karnat 氏はその部門の責任者で、ヒンディー語の権威である。この銀行員たちも非常な関心をもって聴いてくれた。どの部分が一番印象に残ったかを尋ねると、多くの聴衆は「スバーシュ・チャンドラ・ボースの生き方に感動した」と答えた。

13. Hindustani Prachar Sabha (Mumbai) 12 月 2 日 セミナールーム、出席者約 30 名

ヒンドゥスターニー語普及協会は、ヒンドゥスターニー語（難しいサンスクリット系の語彙を多用する高級ヒンディー語でもなく、難しいアラビヤ語・ペルシャ語を多用する高級ウルドゥー語でもなく、その中間の平易な共通語）を普及させることを目標として 1942 年にガンディーによって創設された組織である。ガンディーはこの文体の言葉を「独立インド」の国語にしようとしていたが、インドとパキスタンの分離独立によって彼のこの理想は実現しなかった。しかし、この小さい建物にはガンディーの理想を実現しようと地道に励んでいる人たちがいる。図書館は利用価値があり、各国の総領事館館員のヒンディー語研修を引き受けている。

＜写真：Hindustani Prachar Sabha での講演
看板にはウルドゥー文字も表示されている
右端が筆者＞

14. Panjab University (Chandigarh) 12 月 4 日 講堂、出席者約 250 名

暖かいムンバイから一挙に早朝の寒いパンジャーブ州の州都チャンディガルに飛び、飛行場からパンジャーブ大学のゲストハウスに直行。パンジャービー語学科のヨーグラージ主任教授に迎えられ、多くの学生の待つ講堂に急いだ。初めてのパンジャービー語による講演なので、力を込めて話した。おそらく外国人によるこの言語での講演は初めてだろう。翌日の英字紙が「学生達は、講演の内容よりは、教授が話すパンジャービー語にばかり注目していた」と正直に報じていた。また、もう若者が使わなくなったというある親族名称が私の口から出て、学生たちはいっせいに驚きの表情をしたということも書かれていた。ベンガル人知識人たちと日本との関係は深いと私が語ったコンテキストで、ある教授から、タゴールとほぼ同時期に日本に留学して、帰国後に日本の俳句等を紹介した、プーラン・シンというパンジャービー作家のことを訊かれたが、「名前は知っているが、タゴールと違って記録が日本に残っていないので、残念ながら研究のしようがない」と答えざるを得なかった。講演の後、多くのメディアに取り囲まれインタビューに応じた。

15. Dev Samaj College of Education for Women (Chandigarh) 12 月 4 日 大講堂、出席者約 100 名

午後は、女子高等師範学校ともいえる、教師養成を目的とする女子カレッジに招かれ、講演した。講演が終わると、美しい若い女子学生達に囲まれ、写真撮影だけでなくサインさえ求められた。パンジャービー語を喋るだけで、このおじんが女の子にもてるとは！この後も、教授陣（全員女性）と一緒に記者会見をした。内容は講演内容と違って、もっぱらパンジャービー語のことを訊かれた。夜には、ある TV 番組のかなり長いインタビュー番組のビデオ撮りに応じて、パンジャービー文化と日本文化についても訊かれた。翌日は、バスでアムリトサル

を 11 年ぶりに訪れ、シク教本山のハリマンダル・サーヘブ（ゴールデンテンプル）に参詣した。すがすがしい気持ちになり、今回初めてのヒンディー語地域での講演も緊張感をもってやり遂げようと決意した。

<写真：Dev Samaj College(Chandigarh)
でのインタビュー ＞

16. Uttar Pradesh Maharshi Tandon Open University (Allahabad)

12 月 8 日 セミナールーム、出席者約 50 名

アラーハーバードはヒンディー語の牙城であり、曾遊の地、つまり若い頃の私の留学先であったので、特別の思いがある。きちんとした正確なヒンディー語を話さねばならない。もう半世紀以上も前のことだから、この町も大きく変貌を遂げた。それと共に、多くの恩師や旧友が亡くなっていることがとても寂しかった。

この大学は 1999 年創設の新興（州立）大学であり、市の中心から遠い北部に位置する。Open University というのは、日本では放送大学に相当するものだろうか。しかし、立派なキャンパスがあって、学生もそれなりに沢山いた。午後は急いで市内に戻りアラーハーバード大学で講演した。

17. University of Allahabad (Allahabad) 12 月 8 日 政治学科講堂、出席者約 200 名

アラーハーバード大学は創立 1887 年で、前述のパンジャーブ大学に次いで南アジアで 5 番目に古い名門大学である。講演会は政治学科の主催であった。あまり広くない講堂は、立って聴く学生で一杯になった。教授によると、学生達は日頃立ったままましかも 2 時間もの長時間、講義を聴く習慣はないという。私の話がよほど興味のある内容だった証拠で嬉しかった。

18. Dr.Shakuntala Mishra National Rehabilitation University (Lucknow)

12 月 11 日 講堂、出席者約 100 名

名前からして、身体障害者の社会的復帰を助けることを目的として 2008 年に創立された州立大学である。もちろん、健常者も入学できる。ホテルかと見紛うほど綺麗で立派な建物に驚く。中に入って、学生に「ヒンディー語学科はどこ？」と訊いても、知らないという答えが返ってくるほど広くて迷路のようだ。床もつるつるに磨かれており、私のこれまで訪れた大学でこれほど清潔な建物を見たことがない。すべての教員に個室の研究室があるのも珍しい。車椅子の学生や視覚に障害のある学生がかなり来ていた。パワーポイントの画像が見られない学生には、私の声だけが頼りだったのに違いがない

19. University of Lucknow (Lucknow) 12 月 12 日 セミナールーム、出席者約 50 名

親日家のダウジー・グプタ元ラクナウ市長が、昨日と本日の名門ラクナウ大学での講演のアレンジをしてくださったのだが、楽観的な計画を立てられたので大いに困った。デリー行のフライトに乗るには 1 時間しか講演時間がない。時間がないにも関わらず、学長を呼んでランプに点火する開会の儀式は欠かさなかったので、私はわずか 30 分で講演を終え、逃げるように空港へと直行した。

20. Wisdom World School (Kurukshetra) 12 月 13 日 講堂、出席者約 75 名

クルクシェートラはいわずと知れた「マハーバーラタ」の古戦場として知られる。デリーの北部約 160 キロメートルに位置するハリヤーナ州のこの町に、2011 年創立の Wisdom World School という、保育園から高校までの全人教育を目指す私立一貫校がある。外国語としては唯一日本語を教えている珍しい学校である（5 年生まで、サンスクリット語、パンジャービー語と並んで必修言語科目の一つとなっている）。生徒たちは皆礼儀正しく、「こんにちは」と挨拶してくれる。日本語を教えるのは本校の理事をしておられる秦智氏で、大阪外国語大学でヒンディー語を専攻、総合商社のインド駐在員を経て退職、米国の大学で外国語教育の修士号を取得後、インドの大学等で日本語教育に従事されている。9 年生の生徒を対象に講演し、全員が床に正座して熱心に聴いてくれた。

<写真：Wisdom World School の
正座して聴く生徒達>

21. Kurukshetra University (Kurukshetra) 12 月 13 日 Senate Hall、出席者約 120

名

クルクシェートラ大学は、1956 年にサンスクリット語学科だけの単科大学として創立されたが、現在は総合大学である。秦氏が留学されたヒンディー語学科主催で、横の方が奥行より長い講堂で講演した。ここのメディアは、私が「日本が外国の支配下にあったのは、米軍占領下の 6 年間だけだが、それゆえ独立の尊さをインド人同様、認識している」と発言したことを見出しにしていた。

22. Japan Foundation（国際交流基金）(New Delhi) 12 月 16 日 ホール、出席者約 50 名

ムンバイに続く一般市民向けの講演だったが、若い人の方が多かった。その中でもジャワーハルラール・ネルー大学の日本語学科の学生が来ており、ある女子学生から「大川周明の研究がしたいので、どんな文献があるか」という質問をされて驚いた。平均的な日本の若者でも大川周明に関心を持つ者は少ないと思う。もちろん『大川周明関係文書』を紹介したが、その後最近、新書版で『日本二千六百年史』が出版されたので、それも薦めるつもりだ。

23. India International Centre (New Delhi) 12 月 18 日 本館第一会議室、出席者約 100 名

会員の多くがデリーの名士たちであるこの国際会館は、今上天皇・皇后両陛下が 1960 年、皇太子・皇太子妃殿下であられたときに礎石式を行われた建物で、日本とは関係の深い会館である。今回は本館の第一会議室という立派な部屋があてがわれた。もと外交官やジャーナリスト、物理学者、ガンディー研究家、ヒンディーの専門家やジャワーハルラール・ネルー大学の日本語科の現・元教授たちが主たる出席者であった。しかも議長役を引き受けて下さったのが、高名なジャーナリスのヴェード・プラタープ・ヴァイディク博士という最適任者であったことも、この講演会の価値を一層高めてくれた。また、日本大使館後援に指定され、佐藤仁美参事官にご出席いただいた。

最後の講演なので特別熱を込めて話した。完全にテキストを離れ、自由にジョークまでとばす余裕があった。この最終講演を盛り上げてくださったのが『アシャの日記』の著者バーラティ・アシャ・チョードリ（90 才）さんの「特別出演」だった。前述の秦智氏のご紹介で全く幸運にも、デリー市内の彼女の私邸で面会することができ、しかも私の講演会に「生き証人」として出席をお願いしたいという私の突拍子もない要望に快く応じて下さったのだった。以下は、出席したヒンディー語の専門家で、元鉄道省部長の Vijay Malhotra 博士の次の論評（インターネットで公表）を紹介することで、私のレポートに代えたい。私としては褒めすぎであることと、やや政治的バイアスがかかっている点は割り引いてほしいが、会場の反応は概ねそのようなものであった。

<写真：講演会に出席されたアシャ・チョードリさん>

「…溝上名誉教授の迫力ある、アカデミックな、興味深い、そして愛国心に満ちた講演に聴衆はすっかり魅せられた。溝上教授は、6 世紀の仏教伝来からハイスピード新幹線計画の導入を目的とする安倍総理のアーメダーバード訪問までの出来事を、パワーポイントを使っての見事なプレゼンによりヒンディー語で講演した。同教授は数十年来、大阪大学でヒンディー語の教授を務めた人だが、講演のなかで、日本の政治・経済・文化の全貌をまとめた手法により、溝上教授が日本の歴史を深く研究されたことが窺がえる。国土の小さな日本が大きな力をもつに至った秘訣や、残忍な原爆によってほぼ破壊され尽くしたこの国がいかに立ち上がり、世界の経済大国に成長したかを聴衆はおそらく初めて知ったことだろう。日本の経済発展にインドの鉄鉱石が果たした役割とか、故ネルー首相が進呈した象が日本の子供たちにとってどれほど大切なものであったかは、インド人の誰も知らないだろう。ネルー初代首相から、インディラ・ガンディー元首相、マンモーハン・シン前首相やモディ現首相までの貢献を溝上教授は敬意をもって認めただけでなく、画像によって実証した。インドの独立闘争における日本の貢献を描写するために、スバーシュ・チャンドラ・ボースの生涯に基づく映画の一場面を上映した。この映画の中で、インド国民軍の行軍歌をはじめ、ラース・ビハーリー・ボースとネタージーの演説を聴いて、すべての聴衆は愛国心の感情で一杯になった。最後に、きわめて奇跡的な方法で、教授がインド国民軍のジャーンシー・キー・ラーニー（女性）連隊の元戦士を生き証人として紹介した手法は、溝上博士が単に学者たる講演者ではなく、魔術師であると思わせた。質問形式で、日本で生まれたこの独立闘争の戦士の生涯を聴きながら、聴衆の目は涙に溢れた。溝上博士は、日印の友好は世界平和にとって極めて重要であると説き、多くの例を挙げて、インドは

ヒンディー語を介してこそ高度な発展を遂げることができることを証明しようとした。また、新幹線の導入によって日本が経済発展を遂げたように、インドも新幹線によって経済発展の道を示すであろう、と述べた。氏はアタル・ビハーリー・バジパイ元首相やナレンドラ・モディ現首相のヒンディー語に対する愛情によってインドの名は世界に輝かしいものとなると認めた。最後に議長挨拶の中でヴァイディク博士も、溝上博士の講演はどの点をとっても並はずれており、一人の外国の学者の口から我が国の首相の賞賛を聞いて、感動に震え、モディ首相に対する尊敬の念が心に大きくなり始めた、と認めた。」

おわりに

インドは今にして広い国だと思った。13 都市を都合 8 千キロメートルにもわたって旅行したが、まだまだ足りないような気がする。体力と資力があればまる 1 年をかけてでも、もっと広範囲の旅行を続ける価値はあった。南インド 5 州以外ならどこでも、まず 3 言語（プラス東北インドの一部では英語）のどれかで講演できる。しかし、この 13 都市の旅行でさえ、私のことを水戸黄門に喩える人がいた。なるほど自分はもう十分老人なのだなあ、と思った次第。

後半の講演はとくにメディアへの露出が目立った。私は 2 時間ほどの講演で、実に多くのことを語った。興味深いことに、どの部分に一番反応があったかは、場所により、メディアによりさまざまであったことである。遺憾ながら一部の新聞には、発言の一部を歪曲したり発言していないことを興味本位で「創作」したりする「フェイクニュース」もあった。全講演を通じて、私の講演を直接聴いた人の総数は約 3,500 人に達するが、TV 番組への生出演や YouTube 等のメディアで間接的に私の講演に接した人の数は、その数十倍に達すると思われる。これほどの熱い反応を得たのは、もちろん、インドが「超親日国」であることが第一の理由であろう。しかし、仮に私が英語でやっていたとすれば、これほど騒がれなかったことだろう。やはり、彼らの言葉で語ったことに新鮮味があり、反応が大きかったのだと思う。私は、ヒンディー語劇の海外公演でも感じたことだが、本当にこの分野の学問を選んでよかったと思う。インドこそ、私の終生の「恩人」でもあり、「友人」でもある。なお、外務省認定の「2017 日印友好交流記念事業」〈71 事業〉のうち、新作歌舞伎「マハーバーラタ戦記」と並んで、私のこの講演旅行が代表として、東大インド事務所の「2017 年インド 10 大ニュース」に選ばれました。

【祝！　溝上富夫先生がインド政府から叙勲】

ヒンディー語をはじめとするインド諸言語並びに文学の我国への普及に尽力されてきた溝上富夫 大阪外国語大学名誉教授は、日印間の学術文化交流に多大な貢献をされたことにより、この度、文学・教育分野で、インド政府から”Padma Shri（パドマ・シュリ）”という名誉ある勲章を受章されました。

Padma Shri

2. 『インド独立の志士「朝子」』余話

The Story of 'Asako'

岐阜女子大学南アジア研究センター特別研究員 笠井亮平　　個人会員

ふとしたことがきっかけで物事が動き始め、その過程で生まれた偶然がさらなる偶然につながり、しだいに形をなしていくことがある。わたしにとって「朝子」ことバーラティ・アシャ・チョードリーさんとの出会いとそこからはじまった一連の取材は、まさにそんな偶然の連続だった。その歩みは、『インド独立の志士「朝子」』（以下『朝子』）という単行本として結実した。アシャさん、それに彼女の家族のライフストーリーを軸に、戦前から戦中、戦後に至る日印関係史を描いたノンフィクションである。詳細は同書をお読みいただければと思うが、ここでは取材時のエピソードや後日談などを記したい。

<写真：アシャさんと筆者>

<戦前日本に生まれ育ったインド人女性>

アシャさんは流暢で美しい日本語を話す。それもそのはずで、1928 年に神戸で生まれ、17 歳まで日本で育ったからである。両親はともにインド人。父のアーナンド・モーハン・サハーイはのちに初代インド大統領となるラージェンドラ・プラサードを師と仰ぐ活動家で、1923 年に来日した。「中村屋のボース」ことラース・ビハリ・ボースらとも協力しながら、日本でインド独立運動を展開。1942 年にチャンドラ・ボースが樹立した「自由インド仮政府」では官房長官的な要職に就いた。母のサティ・サハーイも国民会議派の議長を務めた C・R・ダースの親戚で、チャンドラ・ボースとも面識があった。

1943 年、アシャさんに大きな転機が訪れた。インド国民軍（INA）内に女性だけで編成される部隊が設置され、彼女も入隊を志願したのである。英国の植民地支配から祖国を解放する闘いに加わろうという情熱にあふれていた彼女は当時、15 歳。東京の昭和高等女学校（昭和女子大学の前身）で学ぶ女学生だった。東京を訪問していたチャンドラ・ボースに直訴までして 1945 年 5 月にバンコクで念願の入隊を果たすが、同年 8 月、日本の降伏とボースの事故死により INA の活動も幕を閉じた。

<刊行に至る経緯>

その彼女がインドで健在だと知ったのは、2014 年夏のことだった。他用で訪れていたデリーで、『日本経済新聞』ニューデリー支局長の岩城聡さんが会食中にアシャさんの話をしてくれたのだ。彼はアシャさんについての記事を書いたことがあり、その後も連絡を保っているという。その話に強く惹かれたわたしは、次の訪問時にぜひ紹介してほしいとお願いした。昭和女子大学から出版されていた、往時の彼女が日本語でつけていた日記にもとづく『アシャの日記』も入手することができ、成田に向かう機内でむさぼるように読んだ。

同年秋にデリーを再訪した際、アシャさんとの対面が実現した。彼女自身の戦時中や戦後の経験はもちろん、父サハーイやチャンドラ・ボースの活動、昔の東京や神戸の様子。初めて聞く話の連続にすっかり魅了された。彼女が抱いていた情熱、直面したであろう葛藤、激動の時代のなかで支えとなったものは何だったのか――わた

しのなかで、それまで覚えていた興味が、これは自分で手がけなくてはいけない仕事だという決意に変わっていった。おおげさかもしれないが、ある種の「使命」ともいえるものを感じていた。

とはいえ、いざやるとなると簡単な話ではなかった。調べることは山ほどあった。現代南アジアの外交や政治を専門にするわたしにとって、インド独立運動やINAについての理解は基礎的なレベルにとどまっていた。戦前や戦時中の日本のことについても、なにせ70年以上昔のことである。両親ですら戦後生まれの自分にとって、知識として頭の中に入ってはいても実感を伴ったものではなかった。

アシャさんや彼女とかかわりのある人々が当時抱いていたであろう想いに少しでも寄り添おうと、関係者を訪ねて話を聞いていった。アシャさんとは、デリーはもちろん、ビハール州のパトナーで合流したこともあった。このときは同地在住の妹の「ベビさん」ことスモナさん、それに弟のアショークさんとも会うことができた。さらには孫夫婦に会うために滞在していたシンガポールまで押しかけて、アシャさんに当時の記憶をたどってもらったこともあった。

日本国内に加え、台湾、タイ、シンガポール、ミャンマーなど、アジア各国に何度も足を運んだ。アシャさんたち一家が暮らしていた神戸・北野町や東京・荻窪。父サハーイが滞在していたバンコクのオリエンタルホテル。チャンドラ・ボースがINAの閲兵をしたシンガポール中心部の広場――各地の現場でわたしはしばし立ち止まると、目を閉じて往時の様子に想いを馳せていた。

しかし、だからといって情緒的な内容の本にはしたくなかった。アシャさんはじめ関係者の証言を検証し、歴史のなかに位置づけることに細心の注意を払った。話をうかがった多くの方々の記憶は鮮明だったが、なにせ話題は70年以上前のことである。記憶違いや前後関係が入れ替わってしまうことが生じないとは言い切れない。それを客観的な記録と丹念に照らし合わせ、齟齬がないか確認する作業をくりかえした。

出版社とのご縁にも恵まれた。いくら取材や調査を重ね原稿を書いても、企画として引き受けてくれる出版社がなくては日の目を見ることはなくなってしまう。そこで相談してみたのが白水社だった。同社は中島岳志さんの名著『中村屋のボース』の版元であり、自分の企画を出すなら、ぜひ同社にお願いできればと思っていた。幸いなことに、2015年に『ネオ・チャイナ』という現代中国の諸相を描いたノンフィクションの翻訳書を白水社から出させていただいていた。そのときの担当編集者に話を聞いてもらうと、企画として採用していただけることになり、腰を据えて執筆に取り組むことができるようになった。

＜『朝子』は2016年3月に出版された＞

＜一冊の本がもたらしたもの＞

『朝子』は2016年3月に刊行された。出版にこぎ着けることができたという安堵の一方で、翻訳や共著を別にすれば自分にとってはじめての単行本だっただけに不安もあったが、ありがたいことに幅広い読者に受け入れられた。多くの主要紙や雑誌の書評欄でも取り上げていただいた。

刊行後すぐに、デリーに飛んだ。アシャさんに本を届けるためだ。本を両手で丁寧に受け取り、「わたしが知っていることも、そして知らなかったことも、こんなに詳しく書いてくださって。笠井さん、本当にありがとうございました」と深々とお辞儀をしてくださった彼女の姿は一生忘れることがないだろう。この本を書いてよかった――しみじみと感じた。

本をきっかけに、思いもしなかった展開が起きた。読者のひとりを介して、アシャさんが兵庫県魚崎（現神戸市）の小学校に通っていたときに家庭教師をしていたという女性がいることを知ったのである。90歳とご高齢だが、お元気とのこと。わたしはいてもたってもいられず、お住まいのある兵庫県西宮市に向かった。彼女は学校の先生から頼まれて、アシャさんや一学年下の妹ツルさんの勉強を見ていたといい、ふたりのことやサハーイ家

が住んでいた家の様子など、当時のことをなつかしそうに振り返ってくれた。二回目の訪問では、デリーのアシャさんと西宮の彼女をビデオチャットでつなぎ、「再会」を実現することができた。ノートパソコンのディスプレイに身を乗り出し、「朝子さん、聞こえますか。わたしです」と呼びかける様子を見守りながら、わたしは胸が熱くなる思いがしていた。

末妹のベビさんと弟のアショークさんの戦中の様子を知る方も名乗り出てくださった。女学生だったアシャさんやツルさんにくらべ、まだ小学生だったふたりのことは取材のなかで十分に掘り下げることができていなかった。この男性ともさっそく連絡をとり、新宿のカフェでお会いした。彼は当時、神奈川県茅ヶ崎市にあった「白十字会林間学校」という寄宿制の学校に在籍していた。そこに転校してきたのが、ベビさんとアショークさんだった。同じ寮で、寝食を共にしていたという。戦後、サハーイ家はインドに帰国したため連絡をとろうにもその術がなく、どうしているのだろうとずっと気にかけていたが、本を通じてふたりが元気なことを知って安心しました――穏やかな語り口で話してくれた。

会いたいと願いながらもかなわずにいた人びとをつなぐお手伝いができたり、その後の消息を知らせることができたりと、一冊の本を通じてささやかではあるがお役に立てたことは望外の喜びである。また、取材だけで終わらない人間関係にも恵まれたという点で、わたし自身にとってもかけがえのない宝物になった。アシャさんや息子のサンジャイさんご夫婦はもちろん、おひとりおひとり名前を挙げることはしないがお世話になった多くの方々とは、いまでも連絡をとりつづけている。

＜英訳版の企画や次につながるテーマも＞

『朝子』刊行後の展開のなかには、現在進行形のものもあり、英語に翻訳しようという企画が持ち上がっている。サンジャイさんからは、ぜひ英訳を出してほしいとせっつかれてきた。わたし自身もかねてから、アシャさんの物語は日本人だけでなくインドの人びとにも読んでもらいたいと願っていた。まだ出版社を探している状態だが、近いうちにぜひ実現させたいと思っている。

本を執筆していくなかで、今後さらに掘り下げていきたいテーマも出てきた。そのひとつが「東京ボーイズ」である。チャンドラ・ボースがINAの幹部候補生を養成しようと、日本の陸軍士官学校などに派遣した45人の留学生を指す。戦後、彼らはインドに帰国し空軍に入った者や逆にパキスタン軍に身を投じた者、エア・インディアのパイロットになった者など、さまざまな人生を歩んでいった。今年で戦後73年を数えるだけに時間との勝負になるが、彼らの日本での日々とその後を、何とかして形にしたいと考えている。

＜写真：レッド・フォート内の博物館に展示されているアシャさんの軍服＞

アシャさんは2018年2月、90歳の誕生日を迎えた。電話越しに近況を話し合うのもいいが、やはり直接会うのにまさるものはない。彼女の健康を願いつつ、次のデリー訪問を心待ちにしている。

3. 日印文化交流ネットワークの設立

Japan-India Cultural Exchange Network Has Been Established

中村元東方研究所専任研究員、日印交流ネットワーク世話人　堀内　伸二

約2年半にわたり準備してまいりました日印文化交流ネットワークが、昨年11月30日に挙行された発会式をもって正式に設立されました。学士会館において執り行われた式典には、駐日インド大使スジャン・R・チノイ閣下、文化・情報担当のムアンプイ・サイオイ一等書記官を始めとして、日印両国の交流に関わる諸団体の代表約60名の方がご参集下さいました。式典は終始和やかな雰囲気に包まれつつも、実のある意義深いスピーチ、また意見交換がなされ、国際社会の中で極めて良好な日印関係において、「今の時点でどうしても必要な企画」（奈良泰明代表挨拶）であるとして、日印文化交流が担っている役割と意義をしっかりと確認する機会となりました。

本ネットワークは、今日の日印交流の現況に鑑み、また各方面からのご要望・ご期待を受け設立されました。目的を「ネットワーク（情報交換）を通じて、日印文化交流に関心を持つ個人および団体による日印文化交流活動に係る情報を相互に伝達・共有し、相互の活動への協力を促し、併せて、日印文化交流活動全体の質的向上を図りながら、文化を振興し、豊かな人間性の涵養に資する」（会則第3条）ことに置き、①インドの文化や、日印の文化交流に関心をもつ人たちが、Web上で自由に情報を交換し合う場としてのホームページ（催しや活動の情報を寄せ合って広く知っていただくための掲示板、広場、プラットフォーム的役割）の開設、②交流活動の質的向上を図るための懇話会（講演会/シンポジウム/研究会）の開催など、所期の目的を達成するための諸事業を行います。

日本とインドの長年にわたる文化交流はあらためていう必要はないでしょう。1958年に設立された日印文化協会の中心的役割を果たされた故中村元博士が、同年創刊された『インド文化』第1号の劈頭で、インド思想と我が国の精神文化の関連を述べ、平安時代の太古において、東大寺大仏開眼供養の導師を務めた菩提僊那を日本に初めて来たインド人として称揚されたとおり、仏教を中核としながらも、インドの宗教、神々と神話、文学、そして芸術面におけるインド文化の影響は大きいものがあります。近・現代においてはインドの精神文化を代表するR.タゴール、M.ガーンディー、J.ネールーなどはわが国でもよく知られており、さらにラーマクリシュナ、ヴィヴェーカーナンダ、A.ゴーシュ、サイババ等の宗教者の名前もインド人の思想、信仰として私たちにもなじみのあるものとなっています。

日印の文化交流によって、インドの質の高い文化は見事に日本で花開き、また知らず知らずのうちに日本の底流をなし、日本とインドを固く結ぶ役割を担っています。底流というものは気づきにくいのが特徴ですが、「日本では仏教の教える諸行無常・色即是空の存在観が影響しているせいか、西洋哲学で謂う厳しい「実体」（という概念）を逸しかねない」とは、日本を代表する哲学者・広松渉博士の言です。「個」をことさらに主張しない日本の魅力は決してインド文化と無縁ではないでしょう。

文化は、「真・善・美」といった価値に代表される社会の質と深く関わるものとして非常に重要な位置にありますが、今日、政治、経済、軍事、文化といった社会が維持発展されていくべき諸要素の中で文化面における交流が他に比べ退潮傾向にある実情があります。

この点を踏まえ、本ネットワークの設立について挨拶した奈良代表（誠に残念ですが、本ネットワークの設立を何としても成し遂げねばと、病床にあっても最後まで力を尽くされた奈良康明博士は、設立を見届けられたあとに御逝去されました。当日は病床のなか遺言的に残されたビデオメッセージが放映されました）は、次のように語っております。

「一時大変隆盛であったインドの学術・文化・芸術に関する研究が、今日は少し退潮気味であるように見えるが、それは活動の中心が民間の個人に移ったためだと思われる。多くの人がインドに関心を持ち、その文化・芸術に触れる機会の多い今日においてこそ、日印文化交流に携わる人々や諸団体を一つにまとめ、有機的につなぎ合わせるネットワークが必要であり、多くの人にぜひこのネットワークを利用していただき、より多くの人がインドの文化に親しんで貰えるようにしていきたい。」

また広く世界を視野に外交において活躍されてきた日印協会の平林理事長は、祝辞の中で次のように語られました。「日印協会は、日印両国に外交関係がなかった時代から 110 有余年に渡って両国の交流に尽くしてきたが、その活動はややもすると政治・経済の面に偏りがちで、文化面での活動はあまり活発ではなかった。これまでは会員の諸団体の支援をすることで文化面に寄与しようとしてきたが、十分でない部分もあった。インドは『最後の超大国』ともいうべき国であり、この国との友好関係は日本にとって今後ますます重要性を増していく。今後は日印文化交流ネットワークとも連携をとりながら、文化面の活動にも力を入れていきたいと考えている。」

日印交流におけるこのような状況、そして今後本ネットワークに寄せられている期待は、奈良代表のビデオメッセージに感銘を受けられ、用意してきた原稿を後回しにして意義深いスピーチをしてくださったインド大使閣下が、見事に表現してくださいました。

「日印関係はこれまでも良好でしたが、両国のパートナーシップは今日、これまで以上に良好かつ重要なものとなっている。それだけに、奈良代表のメッセージにあった『今日の日印の学術・文化面での交流は一時にくらべ幾分退潮気味だ』との指摘には大いに衝撃をうけました。ぜひ日印文化交流ネットワークの活動により、この矛盾を克服して貰いたい。」

「アジアに波及したインド文化の影響の大きさを鑑みれば､インドを知らずしてアジアを語ることはできない。日本は遙か昔から、仏教を通じてインドに関心を寄せ、その文化を学びとり、自らの文化伝統のなかで消化・発展させてきた｡先日上演された歌舞伎マハーバーラタは､インド本国でもこれほどのものは見ることができない、というほど素晴らしいものであった。日本人の中にインドに対するこのような深い理解が生まれたのは、学術研究に携わる人たちの長年にわたる研究の厚みに負うところが大きく、研究者の方々には心からの敬意を表したい。・・・文化交流は決して一方的であってはならない。100 年以上もむかし、ヴィヴェーカーナンダ師はシカゴ宗教会議の帰路、日本に立ち寄った際に、友人に宛てた手紙に「インドの若者はみな日本を訪れて学ぶべきだ」と書いたが、今日、多くのインドの若者が文化交流・学術交流そして政府の技能研修プログラムを通じて日本を訪れ学んでいることはとても喜ばしいことだ。」

そして最後に、「こうした状況下で、このような素晴らしいプラットフォームを立ち上げた奈良代表を初め、日印文化交流ネットワークの会員の皆さんにお祝いを申し上げたい。大使も大使館スタッフも皆様に協力する準備ができている」と述べ祝辞を締めくくられました。

山田一眞代表幹事が、ネットワーク発足にいたる経緯において「同じくインドに思いを持っている方々が、一つのプラットフォームのもと情報の共有をし、その情報をお互いに利用しあいながら、日印の文化交流を一層濃厚なものとしていただく一助となれば」と語った通り、今後順次 web サイトを充実させ、日印の文化交流の発展のために貢献してまいりたく思いますので、どうぞ皆様の手で育てていただきますよう宜しく、心からお願い申し上げる次第です。

情報共有のプラットフォームとなるホームページ[つながる！インディア] https://tsunagaru-india.com/
Facebook ページでも随時、情報を更新しています。

4. インドニュース(2018 年 1 月)
News from India

1. 内政

【ジャイシャンカル外務次官の交代】

1 月 1 日

- インド内閣任用委員会は、今年 1 月 28 日に任期切れを迎えるジャイシャンカル印外務次官の後任として、ゴカレ外務省経済担当次官（前駐中大使）を指名した。

【冬期国会の閉会】

1 月 5 日

- 冬期国会が閉会。冬期国会では両院で 22 の法案が通過した。

【アグニ V ミサイルの発射試験成功】

1 月 19 日

- インドは約 5000Km の射程を持つアグニ V ミサイルの導入前試験を成功させた。本ミサイルは、アジア全域を射程に収めることから、中国を核攻撃することもできる。インドは今年中にあと 1 回の導入前試験を実施する予定。アグニ V ミサイルが導入されれば、インドは、アメリカ、イギリス、ロシア、中国及びフランスと肩を並べることになる。

【州議会選挙】

1 月 18 日

- ナガランド州議会選挙日程（2 月 27 日投票、3 月 3 日開票）、メガラヤ州議会選挙日程（2 月 27 日投票、3 月 3 日開票）及びトリプラ州議会選挙日程（2 月 18 日投票、3 月 3 日開票）が発表された。

2. 経済

【FDI 制度改革に関するインド政府の発表】

1 月 10 日

- インド政府は、海外直接投資(FDI)制度に関する改革を発表。代表的な改革は以下のとおり。
  - 単一ブランド小売業分野：現行政策では出資比率 49%以下の FDI が自動認可ルート、それ以外の FDI は政府認可ルートであったのが、全ての FDI について自動認可ルートを認められることとなった。
  - 民間航空分野：現行政策では、外国航空会社はエア・インディアに出資できなかったのが、49%まで出資することを認めることとなった。
  - 電力取引所：現行政策では、海外機関投資家（FII）／外国ポートフォリオ投資（FPI）は流通市場(secondary market)のみに限定されていたが、発行市場(primary market)においても電力取引所に投資することが認められることとなった。

【西ベンガル州政府主催投資誘致会合の開催】

1 月 16 日－17 日

- コルカタにおいて第 4 回目となる西ベンガル州政府主催投資誘致会合が開催された。日本、伊、ポーランド、独、韓、チェコ、英、仏及び UAE の 9 カ国がパートナー国に就任、海外の 32 カ国から 350 名の企業関係者の出席があった。日本からは、野口 JETRO 理事率いる日本企業代表団が参加。

【物品・サービス税(GST)委員会第 25 回会合】
1 月 19 日
- 中古車や公共運送に使用されるバイオ燃料のバスなど 29 品目の物品、及び政府機関等に対する法律サービスやメトロ及びモノレールプロジェクトの建設等 54 品目のサービスに係る税率の引下げ等が決定された。

3. 外交

【インド・タイ関係】
1 月 4 日－5 日
- スワラージ外相はタイを訪問し、ドーン・タイ外相と会談した。

【インド・インドネシア関係】
1 月 5 日－6 日
- スワラージ外相はインドネシアを訪問し、ルトノ・インドネシア外相と会談したほか、第 5 回印インドネシア共同委員会会合及び第 5 回シンクタンクに関する印 ASEAN ネットワーク円卓会議に出席した。

【インド・シンガポール関係】
1 月 6 日－8 日
- スワラージ外相はシンガポールを訪問し、バラクリシュナン外相と会談した。

【インド・モルディブ関係】
1 月 10 日－12 日
- アーシム・モルディブ外相兼大統領特使が訪印し、モディ首相を表敬したほか、スワラージ外相と会談した。

【インド・イスラエル関係】
1 月 14 日－19 日
- ネタニヤフ・イスラエル首相が訪印し、モディ首相と会談した後、印イスラエル共同声明が発出されたほか、コヴィンド大統領を表敬及びスワラージ外相からの表敬を受けた。また、インド主催の国際会議「第 3 回ライシナ対話」、印イスラエル・ビジネスサミットに出席したほか、アグラ、アーメダバード、ムンバイを訪問した。

【インド・バングラデシュ関係】
1 月 17 日
- アリ・バングラデシュ外相が訪印し、スワラージ外相と会談した。

【インド・スイス関係】
1 月 22 日－23 日
- モディ首相は世界経済フォーラム出席のためダボスを訪問し、23 日に基調演説を行ったほか、ベルセ・スイス大統領と会談した。また、同フォーラムのサイドラインで、トルドー加首相及びマキシマ・オランダ王妃陛下と会談した。

【印 ASEAN 関係】
1 月 24－26 日
- 印 ASEAN 対話開始 25 周年を記念し、ASEAN10 カ国首脳が訪印。24 日、モディ首相はアウンサン・スー・チー・ミャンマー国家最高顧問、フック越首相、ドゥテルテ比大統領と会談した。また、25 日、印 ASEAN 記念首脳会合が実施され、「デリー宣言」が発出されたほか、サイドラインでモディ首相はジョコ・ウィドド尼大統領、トンルン・ラオス首相、ナジブ馬首相と会談した。26 日、ASEAN10 カ国首脳は印共和国記

念日行事に出席した。なお、ASEAN10ヵ国からの出席者は次のとおり。ジョコ尼大統領、ドゥテルテ比大統領、ボルキア・ブルネイ国王、リー・シェンロン星首相、フック越首相、ナジブ馬首相、プラユット泰首相、トンルン・ラオス首相、フン・セン・カンボジア首相、アウンサン・スー・チー緬国家最高顧問。

4. 日印関係

【河野外務大臣による「インド共和国記念日レセプション」出席】

1月26日

- 「インド共和国記念日レセプション」が開催され、日本政府を代表して河野外務大臣が出席。レセプションの開会式典において河野外務大臣は、インド共和国記念日について祝意を述べるとともに、インドは自由で開かれたインド太平洋戦略の推進にあたり最も重要なパートナーの一つであり、外務大臣として日印関係の更なる関係強化に向けて一層尽力していくとの決意を述べた。

今月の注目点：薗浦内閣総理大臣補佐官のインド訪問

1月16日から18日まで、薗浦健太郎内閣総理大臣補佐官が、インドのチェンナイ及びデリーを訪問した。詳細は以下のとおり。

(1) 1月16日夜、薗浦補佐官は、チェンナイにおける第16回日印海上保安機関連携訓練の実施に際し、海上保安庁長官主催レセプションに出席し、日本の「自由で開かれたインド太平洋戦略」に言及しつつ、この連携訓練の重要性やスリランカ及びモルディブから初めてオブザーバー参加を得た意義について述べ、連携訓練の成功を祈念するとのスピーチを行った。また、1月17日には、日印海上保安機関連携訓練に参加する海上保安庁巡視船つがるを視察し、つがる乗組員を激励した。

(2) 薗浦補佐官は、このチェンナイ訪問の際に、バドナガル・タミルナド州管区海軍司令官及びプロヒット・タミルナド州知事との間で、海上保安分野や防衛分野を始めとする様々な分野における日印間の更なる関係強化等について、幅広い意見交換を行った。また、日本企業関係者との意見交換を実施し、プロヒット州知事には、日本企業支援に関する働きかけを行った。

(3) 1月17日夜、薗浦補佐官は、デリーにおいて、インド主催の国際会議「第3回ライシナ対話」に出席し、約120名の出席者を前にスピーチを行った。このスピーチにおいて、日本の「自由で開かれたインド太平洋戦略」の下での日本の取組について紹介しつつ、国際社会が連携してインド太平洋地域の平和と繁栄を確保すること、特にインドの役割が重要であることを述べつつ、米国、オーストラリア、ASEAN 等との有志国と連携をさらに強化したい旨述べた。また、北朝鮮の核・ミサイル問題を解決するために国際社会が連携して圧力を高めていく必要性を強調した。

(4) 1月18日、薗浦補佐官は、シン外務担当閣外大臣との間で、政治・安全保障、経済・経済協力、人的交流の日印二国間の課題、地域情勢やグローバルな課題について協議した。その中で、自由で開かれたインド太平洋戦略の実現に向けて引き続き協力していく点や、北朝鮮に対してさらなる圧力を強化する点で一致した。

5. イベント紹介
Japan-India Events

＝◇ 最近のイベント ◇＝

◆ 第 69 回 インド共和国記念日式典 in TOKYO　“गणतंत्र दिवस की बधाई हो！”

＜写真：河野外務大臣によるスピーチ＞

1 月 26 日（金）11:30 より、ホテル・オークラにおいてスジャン・R・チノイ駐日インド大使主催のインド共和国記念日式典が、日印双方の政財界や在京外交団をはじめとする各界から多数のご来賓の出席を得て、盛大かつ厳かに執り行われました。

式典開催前、会場入り口には、チノイ駐日大使閣下はじめ公使などがご婦人と並び、来賓者一人ひとりと握手をしながら言葉を交わしました。開会の挨拶ではチノイ大使に続き、河野太郎 外務大臣が共和国記念日のお祝いのスピーチをされ、乾杯の運びとなりました。合間には、インド古典舞踊のカタックが披露され、インドの伝統文化で来賓をもてなしました。昨年歌舞伎「マハーバーラタ戦記」でご活躍された尾上菊之助氏が、当日舞台のため欠席され会場には、夫人の寺嶋瓔子さんがお見えになっていました。去年にも増して多くの来賓が会場を賑わし、共和国記念日をお祝いしました。

共和国記念日はインド憲法が発布され、共和国となったことをお祝いする日であり、本国の首都、デリーの中心部に位置するインド門と大統領官邸を結ぶラージパト通りでは、毎年盛大なパレードが行われます。このパレードでは、インドが誇る軍事力や多様な文化が色鮮やかに表現されます。今年は、東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟 10 カ国の首脳が招かれました。

＜写真：ホテル・オークラでの式典の模様＞

◆ インドを舞台にした小説『百年泥（ひゃくねんどろ）』が第 158 回芥川賞を受賞！

『百年泥』の著者、石井遊佳さんはインド、チェンナイ在住で日本語教師をしている。今回芥川賞を受賞した作品『百年泥』は、滞在中チェンナイで実際にあった大洪水の経験を生かし、生々しく描写した「百年に一度と言われる洪水」をもとに物語は展開する。石井さん自身は、特に「インドが大好き！」というわけではなく、サンスクリット語研究をしている夫についてインドへ渡ったそう。たまたま辿り着いた先がインドで、そこを題材にした作品が芥川賞を受賞してしまったという具合だ。インドでの生活はハードで、3 年以上書くことを中断していたが、本作品は、昨年 2～3 カ月仕事が空いた期間で一気に書き上げたそうだ。「書くことは私の”業（ごう）”だと思っている」と豪語するほど書くことに人生を捧げる石井さんの世界観が、インドを舞台に次々と展開する。
本書は、現在、全国書店、アマゾン等で好評発売中です！

＝◇ 今後のイベント ◇＝

インドを語る集い＜様々なインド＞第 43 回
「グリーン・ファーザー杉山龍丸がインドに遺した軌跡」

ガンディー翁の後継者たちとともにインド緑化に取り組みインド人から“グリーン・ファーザー”と称される杉山龍丸氏は日本では「知る人ぞ知る」、日本人よりはむしろインド人の間にその名が伝えられているようです。龍丸氏は、祖父・茂丸氏の「中村屋のボース」との奇縁もあり、深くインドの緑化運動に関わりました。龍丸氏は作家・夢野久作の長男です。龍丸氏の子息が「夢野久作と杉山 3 代研究会」（東京大会）のために上京されるのを機に講演いただきます。

演題：「グリーン・ファーザー杉山龍丸がインドに遺した軌跡」
　　～杉山家のラス・ビバリ・ボースからインド緑化までのインドとの関わり～
講師：杉山満丸氏　(福岡県在住、龍丸氏の子息)
主催：公益財団法人　日印協会
日時：2018 年 3 月 16 日（金）　18:00～19:30
場所：公益財団法人　日印協会事務所（TEL　03-5640-7604）
　　東京都中央区日本橋茅場町 2-1-4　スズコービル 2 階
講演内容（予定）：
1. ラース・ビハーリ・ボースとの出会い
2. 祖父と父から託されたアジアへの想い
3. インド人青年との出会い
4. 初めてのインド
5. 飢餓に向き合う
6. 緑化の夢

定員：先着 30 名　*お申し込み方法は、同封のチラシをご覧下さい。
（申込み多数の場合は会員を優先させて頂きます。お断りする場合のみご連絡いたします。）
締切：3 月 9 日（金）
参加費：協会会員　無料　（非会員　500 円）

◆　ナマステ福岡 2018　　4 月 21 日（土）～4 月 22 日（日）

ナマステ福岡は、在日インド人達による手作りのイベントです。ステージでは、インドの多彩な文化を紹介する伝統芸能や、様々なパフォーマンスが披露されます。ブースでは、インド料理やインド雑貨などの販売もあります。
九州地方における大規模インド・イベントの先駆けです！

場所：天神中央公園（福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 1）
日 時：2018 年 4 月 21 日（土）10:00～19:00　　**入場**：無料
　　4 月 22 日（日）10:00～18:00
主 催：ナマステ福岡実行委員会
「Namaste Fukuoka」の Facebook ページでも詳細がご覧いただけます。

6. 新刊書紹介
Books Review

§『ガンディー 平和を紡ぐ人』

著者：竹中 千春

発行：岩波書店（岩波新書）

定価：本体 820 円＋税　 ISBN978-4-00-431699-2

著者は当協会の理事であるが、長年インド研究に携わり多くの優れた著作がある。その著者が、世に数多くの「ガンディー本」がある中で、敢えてここでまた「ガンディー」に挑戦する意図はなぜか、この新書発行を知り大きな関心を抱かずにいられなかった。

「神のようなマハートマ（偉大なる魂）」でもなく「偉人のガンディー」でもなく、「人間としてのガンディー」を描き出し、ここで「学ぶべきことがある」とすれば、「私たちと同じように悩み、ときには挫け、それでも八〇年近い人生を生きた一人の人間として、モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーという人を見なければならないと思う」という著者の意図は、インドについての深い知識と幅広く丹念な資料の渉猟ならびに卓越した筆力により十分に達成され、マハートマとなった人間ガンディーへの著者の熱き思いが伝わってくる。

「非暴力不服従」を最大の武器としてインド独立運動を戦ったガンディーは、「人間が好きで、いつも人々の中にいて、語りかけ、手を取り合って、人々とともに日々の苦楽をした」。そして人々に「マハートマ」と尊敬され、「バプー（父さん）」と愛されたガンディーが、インド独立 5 か月半後になぜ暗殺されなければならなかったのか。 “My life is my message” ガンディーは自分の生き様をもって人々に接してきたが、「神ならぬガンディーは過ちも失敗も犯し、意図に反して彼を恨み憎む人も生み出した。しかし、ガンディーは内省を深め、並外れた努力によって、神あるいは運命に与えられた仕事を全うしようとした」人であった。平和を探求した偉大なマハートマ・ガンディーはインドのみならず世界中の多くの人々に尊敬されているが、それなのに今も「暴力の時代は過酷さを増しながら続いているように見える。暴力の連鎖は止められないのだろうか。その答えを探す仕事は、この時代を生きる私たちに委ねられている」。これは終章に記された著者のメッセージである。

本年 1 月 30 日は 70 回目のガンディー殉難日であった。また、来年（2019 年）はガンディー生誕 150 年を記念し、一年を通してインドのみならず世界各地で記念イベントが開催されるという。これを機に著者のメッセージを重く受け止め、「平和を紡ぐ人・ガンディー」をあらためて勉強し直したい。

（文責：日印協会参与　宮原豊）

7. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は、2018年4月20日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<編集後記>

インド古典舞踊グループ「Tillana Tokyo」の結成10周年記念公演が、1月20日（土）内幸町ホールにて開催されました。「このことを、なぜ編集後記で？」と思われる方もいらっしゃると思いますが、実は、私こと編集子もこのステージで踊っていたのです。「事務局内にインド文化を嗜む人物がいることは、良いネタになるから後記に書くといいのでは？」ということで、厚かましくもこの場を借りる次第です。起源を四千年前までさかのぼるインド舞踊は、世界最古の舞踊と言われており、タイやインドネシアなどのアジア諸国に伝わる民族舞踊の原型にもなっています。人と神とをつなぐ手段として発達してきたインド舞踊は、20世紀になるまで現在のように人々の前で踊られることはありませんでした。人々の目に触れるようになって初めて、現在踊られている形が完成したと言えます。インド舞踊の持つ魅力は正に、歴史が受け継いできた重みと、「祈り」から「芸術」への本質的転換を経た新しさが持つ柔軟性からくるのではないでしょうか。インド舞踊とは、歴史を感じさせながらも「古さ」を感じさせない現代の新作歌舞伎のような存在と言えます。さて、編集子はインド舞踊の中でも王道のバラタナティヤムを習っていますが、これがなかなかの曲者。入門したての頃は、一つのステップ（単に足を上げて下ろすだけですよ！）を踏むのにひたすら中腰で鍛錬させられる事3カ月。未だにこの「一つのステップ」に満足できたことがないのです…バラタナティヤムは腰の動きがなく、ストレートな動きが多いことから、はたから見ると「誰でもできる」気がしてしまうものです。しかし、本物の踊りを見ると分るのですが、踊り子はアスリートです。あの厚化粧の笑顔の下には、鍛え上げられた肉体が隠れています。それもそのはず、皆、神さまを演じるのですから並大抵では、その活動が「宇宙の律動とつながって作用するといわれる」シヴァ神になることはできません……と、たいそうなことを書きましたが、編集子はまだペーペーのへっぴり腰。ティラナという温かいグループの中で、先輩方に見守られながらゆっくりじっくりとインド舞踊の魅力を肌で感じています。　(玉岡 善美)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
	学生	１口(4,000円)から		学生 1,000円
	一般法人会員	１口(100,000円)から		法人 5,000円
	特別法人会員	１口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド Vol.115　No.2 (2018年2月16日発行)　　発行者 平林 博　　編集者 西本 達生
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　Fax: 03-5640-1576　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/